



(號七十七百二第)

自慶會其他雜報廣告

統一俳句

多數

其他

課題和歌「名所花」

子爵 清岡長言選

日蓮聖人の御事歷奉詠(四)

熊澤優子

機微譚語 (五一)女性の味方 (五二)日は禍の門

山根青村

日蓮主義の信仰と活動 (第七回)

僧正 井村日成

日蓮主義の信仰と活動

大僧正 本多日生

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發

▶ 番三三五三三京東座口替振 ◀

將中軍海  
 述君郎太鐵藤佐

刊新最

我萬邦無比なる國體の尊嚴を能説し罄くして國民の自覺を叫び根本的に忠君愛國を唱へ併せて英傑日蓮主人の人格と教義の峻絶を鑽仰賞揚して思想の撰擇と修養を奨むるものは本書也。尊嚴の國體と秀絶の教法との相抱冥合の説述は論義整然字句熱烈にして一讀正氣靈動の概を生ぜしむ、國家、社會、教育、婦人の諸問題及び神儒佛、外來思想に對する批判、並に歐洲戰亂に對する感想、青年に對する訓誡、海外發展策等滔々數萬言辯じ明さるはなし。

日本國體と日蓮主義

三六判總クローズ函入  
 紙數四百五十頁  
 定價壹圓貳拾錢  
 送料 八錢

館文博

東京市

本町三

(行印舍秀三 地番一目丁二町代土美區田神市京東)

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊)發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾榮四郎△印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五風)

# みたから

毎月一回発行  
一枚代貳錢五厘  
郵税なし

▲二月には是非発行するのてしたが、種々の都合で又々発行が延びましたが、四月はモウ延ばされまいますまい。自慶會の記事は細大漏さず掲載します。修養と信仰と家庭とを兼ねて女にも子供にも読め、併せて労働者諸君の良友となりたい目的で眼にかゝるつもりです。尤も最初は小新聞體四ページの半ペラものですが、漸次八ページ位にするつもりです。差當り統一の讀者諸君へ御講讀を御願ひしたいので御送り致します。御用なき御方は御面倒でも其雜誌に不用の【附箋】をして御返し下さるか【此場合は切手貼付に及ばず、又封紙を改むれば五厘切手でよろし】又は葉書で一才御報らせ下さいますれば發送致しませぬ。其他は御購讀御承知のものとして統一代金御依頼の際集金差上げますから宜敷御依頼致します。

統一編輯所内みたから發行部

# 急告

三月の五日付で、活版部の方から、東京印刷業者組合の決議に付、印刷賃を以來又々三割以上値上げるから承知せよとの通知が來ました。どこまで値上げになるのてせうか、此上は誌代を上るわけに参りませぬから、頁數でも少くするより外はありませぬ、惡からず御承知下さい。一昨年からは、從來例へば五錢で出たものが十二三錢もかゝるやうになつたのです。御購讀者の御推量を祈ります。△次に永らく代金不納の方で、問合せも御返事もなく、又集金郵便は拒絶するこんな方は次號からは送本を中止するかも知れませぬ。△又永らく無代で配達しました方々へも以來は成るべく代金御拂込をお頼み致します。△以來代金は前金の取立方法に漸次取り運んで行くつもりです。豫め御承知下さい。△新に御購讀は一二月の内に前金を集金郵便で御依頼致しますから御承知下さい。

來る四月十一日より十三日に至る三日間

# 大法要

一 祠堂施主祖先靈法要  
財團翼賛員祖先靈法要

午前九時 法要  
午後一時 法要  
午後三時 法要  
午後七時 演說

大正七年三月  
京都寺町二條

# 總本 妙滿寺法要部

●念珠ならは小野嘉助店へ●  
●日蓮宗各本山御用達●  
●顯本法華宗妙滿寺御用達●

●御念珠各種●  
●弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候●

●念珠商 小野嘉助●  
●京都市寺町通船場下ル●  
●電話 中二六〇八番●  
●振替口座大阪一九七二〇番●

# 日蓮主義の信仰と活動

(二月二十六日相互俱樂部に於ける妙道會の講演)

## △序言

今日は日蓮主義の信仰と活動と云ふ題を掲げて置きました。近來日蓮主義があらゆる方面に歡迎せられるやうになりました。從來の弊害多き信仰より覺めて、正しい意義ある信仰が段々盛んになつて參りましたのは、教の爲にも又我が國家の爲にも頗る慶賀すべきことであります。日蓮主義の信仰が卓越して居るものであると云ふことは、私が今此の講壇に於て詳しく申上げずも、既に今日は知れ直つて居る事實であります。故に詳細の事は今日は申上げませぬが、唯だ大體に就て日蓮主義の信仰は如何なる根據を有し、其の信仰は如何なる本尊に向ひ、又其の信仰の意識内容はどうか云ふ性質のものであつて、其の信仰に導かれたる活動と云ふものは、どう云ふ有様に現はれて行くものであるかと云ふことに就て聊か申述べて見やうと思ふのであります。今日は他に天晴會が開かれるのであります。私は其の方にも出席をして矢張り御話をしなければならぬやうな都合で、實は時間が横切つて居るのであります。天晴會の方は望月小太郎君が今日は何か話されますから、其の方に先きに願つて、私は其の後に御話を申すこととして當方に出席したやうな次第であります。

## 本多日生

### △各教典の比較

日蓮主義は何を根據にして其の信仰を打立てたものであるかと申しますれば、第一其の據る所の經典は即ち法華經であります。宗教の信仰は個人々々が任意に宜さうなことを考へついで極めまするのも一の方法ではあります。併し餘程豪い人でも自分の短かい經驗と淺い思慮に依つて組立てましたる信仰と云ふものは何處かに缺點があるものである、人は自徳根性を持つて居りますから、自分を除程深い思慮を重ねたと思つても、其の人一人の思ひ付きてやつて行く信仰と云ふものは、危険なものであります。故に宗教の信仰を觀するには、それが如何なる經典に基づいて組立てられて居るか云ふことを第一に考へなければならぬ。多くの場合には經典と經典との比較を致しますれば、其の信仰の價値、其の

信仰の如何なるものであるかと云ふことは分かるのであります。例へば天理教の信仰はどうか云ふものと云へば、天理教の基いて居る所の經典がある、殆んど無い位のものだけれども兎に角何とか云ふお婆が考へ付いた唄見たやうなものが少しある。さうしてそれを學者が宜い加減に筆を執つて順序宜くして間に合はせたものであります。併しさう云ふものは今正確なる研究に移して見ましたならば頗る價値の少ないものであります。又基督教は世界の最も高等なる宗教として許されて居るのでありますけれども、併し彼が據る所に居る聖書と云ふ書物、之れを調べて見ますと、法華經に比較して見る場合に、私の考へては逆も及ばないと云ふとを斷言する、是は自分等が法華經を信するが故にさう云ふのではなくして公平なる研究の上に於て明に言へるのであります。何等の點に於て言へるかと申しますれば、眞理を明かにして行く哲學の上の智識の批判に於て基督教の聖書は法華經よりも淺薄であります。(拍手)

### △基督教の道徳觀と日本 本の道徳觀の相違

又道徳上の批判に就きまして基督教は中々立派なる教訓がありませうけれども、彼は國を異にして現はれ、歴史を異にして現はれて居りますこと故に、どうも此の日本の吾々が守つて行く上に色々の差障りを生ずるのであります。それはどう云ふ點であるかと申しますれば色々あります。大體日本で申しますれば家庭と云ふものが中心になつて、家は先祖代々傳はつて居つて、さうして其處には第一親子の關係と云ふものが日本では先に現はれて居るのであります。其の娘に養子をするとか、其の息子に嫁を娶るとか云ふことと、親子の關係と云ふことが、第一縦に考へられて、先祖と云ふものと子孫と、斯う云ふ風に日本では考へて居るのであります。然るに西洋の方では横に考へられて、夫婦と云ふことが出發點であります。さうして夫婦の中に出來た子供、親子と云ふ關係がありますが、親子の關係よりも夫婦と云ふ關係の方が重い

ことに考へられて居るのであります。其の事が善いか悪いかは別の問題でありませうが兎に角日本に於ては親に對する孝行と云ふものは、夫婦の關係よりも重いことになつて居る道徳であるのであります(拍手)それでありませうから基督教を信じたい人が此處に若し御出でなりましたら何ですが、夫婦の關係を重しと考へる思想の爲に、日本の家庭に於てはどうも平和が破れるやうなことになるのであります。無論東洋と雖も夫婦の關係を重んじないことはない。「夫婦相和し」と云ふことは、教育の勅語にもあります通り、日本は本能的に夫は妻を愛し、妻は夫に貞節を盡すと云ふ事に就いては、澤山淨瑠璃や芝居にも美しい其の間の關係は説かれてあります。親子の間に現はれた道徳の方が尊しとするのであります。此の事に對しては基督教が如何に辯明を試みましても、我國の道徳とは即ち軽い重いの關係が違つて居るのであります。是はギョウリックと云ふ先生が……此の人は京都の神學校の先生で、二十三年も日本に居られまして、近頃は米國へ歸

られて日米問題に就て日本の爲に大變盡力せられて居る立派な人でモウお爺さんであります。歸一協會と云ふものが東京にありまして、東京で毎月一回づつ會を開かれて居りますが、此の人は京都に居られても態々その會に出る爲に汽車に乗つて來られて新橋に――未だ新橋の停車場の在る時分の事ですが、新橋に來られて彼處から馬車に乗つて上野の精養軒若くは大學の中の御殿に來られる、會が済むと又直ぐ新橋から京都に歸られると云ふ位、態々京都から其の會へ出席される程熱心な人でありませう、東京に居る人でも何でもない用に托し、又は病氣だとか何だとか云つて欠席する人があるにも拘らず、ギョウリック先生は京都から必ず欠さず來られた、中々豪い人でありませう併し其の人が歸一協會で澤澤男爵の質問に答へられました。澤澤男爵の質問は、今假りに親と妻とを伴れてさうして船に乗つて川を渡る場合に、船が川の真中で顛覆した、左の手で以て一人を抱いて、明いて居る片手で泳いで向ふへ渡る事は出来るけれども、兩方抱いたのでは三人

ながら溺れて死ななければならぬ、斯う云ふ場合があつたと假定して其の場合に當つてはお母さんの方を抱いて渡るかお嫁さんの方を抱いて渡るかと云ふのでありませう、ギョウリック先生は暫く考へて居りました。吾が信ずる基督教の教から見ますと、お母さんを捨て、女房を抱いて向ふに渡るより仕方がない、是はどう云ふ譯かと云へば、お母さんはモウ永らく人生に居て永年暮して、美味しい物も食べ面白い事もして先きの短かい人でありませうから、詰り其の方を殺して妻は若い者であるし前途澤山御馳走も食べなければならぬ者であるから、此の者を助けねばならぬと云ふことを言つた。是は強ち若い者が女房に惚氣けて言はれると云ふものでなくして、基督教道徳上の根本を説明して言はれたのであります。所が日本の方に於てはそれが許されないのであります。それは女房も可愛いには違ひないけれども、親と女房とどちらを助けるかと云ふ場合には親を助けねばならぬのが日本の第一の道徳であります。又女房も日本の女房ならば「私を助けて

親を捨てるやうな者は、そんな者は不孝者であるから連添はぬ」と云ふ程に、女房が先きになつて「自分を殺しても親を助けて下さい」と云ふ風な道徳心が出来て居る。それが日本婦人なつてあります。

### △身を殺して母を救 ひし藤田東湖

嘗て安政の大地震と云ふものがありまして、私共は知らぬのであります。東京でも長生きをして居る人は御承知でありませう、未だ私の父が東京在勤中の出来事でありませう、中々豪いことであつたさうで、其の安政の大地震に亡くなられた人の中に、有名なる水戸の藤田東湖と云ふ豪い人がありました。彼の「正氣の歌」を作つた人で「天地正氣、粹然鐘、神州、秀爲不二巖、巍々聳千秋、注爲大瀛水、洋々環八州、發爲萬朵櫻」と云ふ名高い「正氣の歌」を作つた人で水戸の弘道館の總裁になつた大學者である、非常に偉い人であつて勤王の志を懐いて爲に牢屋にも入れられ或は長く隅田川の方に閉門を言ひ付かつた爲に、長ら

く彼所に居つた人でありませう。維新の勤王家の中では最も名高い人でありませう。此の藤田東湖が安政の地震に家が倒れたのであります。其の地震の來た時分に自分は外に飛出したが、考へて見るとお母さんが出て居られない。是は大變だ。と云ふので再び家へ母を連れ出すべく飛込んで行つた、所がお母さんを連れ出すことが出来ないで家が倒れて死んで仕舞つたのであります。其の時に後で家を片付ける人夫が段々家を退けて見た所が、東湖先生は自分が坐つて、さうして前方へ斯う云ふ風に手を突いて、斯うしてお母さんを腹の所に入れて、上から梁か何か落ちて來て、さうして自分は死んで手も突張つて、斯うして居つたのであります。それが爲に東湖先生は死んだけれどもお母さんは其の下に傷も無く生きて居られたのであります。死んでも親を救ふ爲にはチャンと手を突張つて重い木を脊負つて死んで居つたのであります。是は名高い話でありまして、斯う云ふ所が日本では善いとしてあるのであります。(拍手)是は如何に世が遷り變りまし

ても、此の所謂東洋の道德として歴史的に發達して参りました道德と云ふものは變へることは出来るものでないのてあります。(拍手)

### △佛教の道德と法華經の超勝

所が佛教には此の意味は四恩の道德と云ふことがありまして、第一に父母の恩と云ふものを力強く教ゆる所の宗教であります。夫婦相互の恩と云ふことも説きますけれども、是は四恩の中には無いのであります。四恩の方には父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩と四つ、斯う數へてあります。それから六恩と云ふ場合には師匠の恩と夫婦相互の恩と語り妻から言へば夫の恩、夫から言へば妻の恩と云ふものを加へて、之を六恩として佛教では教へて居りますけれども、第一に數へられて居るのは父母の恩であります。又其の事は教育勸語にもあります通り。

克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我が國體ノ精

華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存スと仰せられて居るのであります。是は外のことは變つても、日本のあらん限り是は維持して行かなければならぬ大切な道德であります。(拍手) 基督教は此の點に於て東洋——日本の道德とどうしても合はないものであります。(拍手) 斯がる意味に於て法華經は哲學上の智識の批評から見ても基督教の聖書以上であり、道德上の問題から見ても基督教の聖書以上である、然らば純宗教として之れを比較したる場合にはどうかと云ふと、是が又基督教などよりは法華經はズツと優れて居るものであると云ふことを、私は此處に斷言するのであります。其のことは後に至つて詳しく申し上げます。

### △卓越せる法華經の位置

何れにしても法華經の經典が今申すやうに非常に立派なものである、他の色々の宗教に比較して法華經の御經と云ふものは、天理教の如きふみき婆さんの詠んだ「一列濟まして甘露臺」と云ふやうな

未だ空に残つて居るが、御日様が出て來ると其の光がスツツと薄く白くなつて消えたやうになつて仕舞ひます、星もさうです、電燈も御日様がある中は用を爲さない、法華經と云ふ教はチャンと其の通り説いて居る。一切の光の中には日天子最も明るきが如く、水に譬ふれば水の中には池もある、河もある、けれども大海を以て水の玉様とするが如く、法華經も亦復是の如しと説かれてある。

宿王華、譬へば一切の川流、江河の諸水の中に、海爲第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。

是は藥王品の十喻と言つて十の喻へを擧げて法華經の優れたことを説かれて居るが、是は誰が見ても分かることであります、星の光と日の光を比べた時に、星の方が明るからうと思ふ人は無いのであります。まの法華經は日天子の光の如きものであります。御日様は一つではあるけれども凡ての光を打消す力があるのであります。其處が餘程不思議である、星も月も未だ空に出てゐるが御日様が獨り出て來られると星も月も消ゆるのではないが白くな

つて残つて居る儘認められなくなつて來るのであります、日が照つて來ると蠟燭の光と云ふものは、點火の附いた儘在るか無いか分らぬ様になつて來る。法華經の理想は其處にある、日蓮聖人の折伏と云ふものは其處に在るので、決して他の宗旨と闘ふのではない、非常に偉い強い力のものが現はれて來るから、外のものは映奪されるのであります、映と云ふのは御日様の光が強きが故に、電燈も月も星も其の光を奪はれると云ふ意味であります。法華經の教はさう云ふ意味で阿彌陀經を敵としたり、大日經を敵として比較するのでなく「日出れば月や星が隠れる」と云ふ意味に於て秀で、居る、他の經典を凌駕して居るのである。(拍手) どのようなことも總べて法華經は立派なんである、卓越して居るのであります。(拍手)

### △宗教の三問題と天理教

宗教の大事な問題が色々ありますけれども殊に主なる問題と云ふものは三つある、人各々自分はどう云ふものであ

ことゝは無倫比較にならない、基督教の聖書とも比較にならない、卓越したる尊い經典であります。(拍手) 佛教の中には非常に良い御經が澤山あるのであります。其の中には或は華嚴經を取つて華嚴宗と云ふ宗旨が出来た、阿彌陀經を取つて淨土宗や眞宗と云ふものが出来たりしました。色々に宗旨が分かれて居ります。其の種々に分かれて居る宗旨も、基く御經に依つて分かれるので、大日經と云ふ御經を根據にして出来た眞言宗、其の眞言と法華と何方が善いかと云ふ問題を研究しやうとすれば、弘法大師が偉らからうか。日蓮聖人が偉らからうかと言つて、顔ばかり見ても駄目である、大日經と法華經と比べて見れば其の勝劣は直ぐ分かるのであります。色々其の他の御經を據り所にして發生して居りますけれども、一切經の中に法華經と云ふ御經が最も秀で、居るのであります。例へば光りの中に於て御日様のやうなもので、御月様も星も、それから明るい電燈もありますけれども御日様が出て來ると月も星も電燈も皆な光がなくなつて來るのであります。御月様が

るかと云ふことを明かにする事が第一、モウ一つは、自分が願ふ所の佛様と言ひますか神様と言ひますか、本尊と言ふものが一番偉らいことが明かになつて來なければ宗教は立たない、佛教で言へば佛様である。それからモウ一つは、天地法界と云ふて凡てのもの、根本を説明することが一つであつて、以上此の三つであります。そこで詰らぬ教で考へて見たり直ぐ分かる、天理教なら天理教でもやはり此の三つを言はなければならぬから、そこで十柱の神様と云つて、初は一つの神様を天理王の命と言つて居つたけれども、そんな神様は無いからして、十の神様を一つに寄せて其の總名を天理王と名けると云ふことに誤魔化したものであります。それも初は天理王と言はずに「テニン」と言ふたのですが、今度は天理王と變へて來た。それから天理王命と云ふのはチョツとそんな神様が無いから昔の神様の名を十ばかり寄せて來て、十柱の神様の總名であると言つて居る、即ち十人の神様を以て天理王の命と言つて神様とした、それが一番偉らいものであ

何でもないけれども、手を動かすのは何とか云ふ神様が手を引張つたのだ、足を動かすのは足の神様が引張つたのだと云ふ。そこで手が動くと言つては手の神様に御禮を言ひ、足が動いたと言つては足の神様に御禮を申す。笑聲が出るのは何とかの神様が出して呉れるのだからと言つて、變な聲を出して何やら、高い山から谷底見れば(大笑)と言つてやつて居るのであるけれども、何れにしても是は神様を説明する考へなのであります。それからモウ一つは自分を説明することに就て一向譯が分らぬから、人間は鱒見たやうな物で、泥の中からノッ／＼出て来た物だと言ふ(笑)何のことだか分らない、土臺學問も何も無い奴が言ふのだから可笑しなことを言ふけれども、兎に角説明せんければならぬから、一の原因を説明するのであります。世界の説明は能く分らぬものだから宜い加減な事を加へて、さうして世界は鶏卵のやうな物で、それが黄味の方は下に降つて白味の方が上に昇つて天地が出来たと云ふやうなことを宜い加減に言つて居る。これから落付いて

行く先は天國とか高天原とか極めんければならぬから、落付く先は甘露臺と言つて居る。一列濟まして甘露臺一列濟ましては分らぬが、此の世の中での一切の働きを仕舞うことが一列濟ますこと、即ち世の中を仕舞つて人生の用事が終つて落付く先は甘露臺、そんなら甘露臺は何處だと云つた所がそんなものは何處にもないから、今頃大和に大きな建物を石で組んで、今彼の天理教の本部で之を造つて居るが、其中に行くと云ふやうなことを言ふのであります。

△薄弱なる基督教理の根柢

是等は最も下等の宗教でありますから開いて居ても可笑いやうなことでありますが、やはり基督教に致しましては神様がゴットがあつて、それは非常に偉いものであつて、天地萬物を造つたと云ふ六日掛つて造り、七日目に休んだから人間も七日目には休まなければならぬと言つて居るで總ての物を澤山造つて、一番終ひに人間を造つて、今迄造つた物は人

間が使つて宜いと云ふことである、所が素と造る時分には善い者か悪い者か分らぬ、ボンヤリして居つたが造つて見るとそれが神様に背いて蛇に騙された「アダム」「イブ」と云ふ二人の男女が、尤も神は一人しか造らなかつたのであります。が後に「イブ」と云ふ者を「アダム」の腹の肉を取つて女房を拵へた、故に最初から基督教では親子の關係でなくして夫婦を造つたのである。「人を男女に造り給へり」と言ふ是が喧しく言はれて日本の道徳から弾き飛ばされる所でありました。男女と二つ出来て初めて人を造り終つたのである、まるで日本人から見れば何でもないとのやうであります。西洋では是非常にえらいことである。「人を男女に造り給へり」と云ふことに就て非常に威張つて居るのである。さうしてそれが蛇に騙された、是がチヨツと可笑しい、騙すやうな悪い蛇を神様は先きに拵へずに置いて呉れたら宜かつた(笑)是は皆神が造つたのだから神様に其の責任があると思ふ(笑)騙す蛇を造ると云ふのは餘計なことであらうと思ふ、尤も東洋の方では騙さ

れは致しませぬが、兎に角騙まされてしまつて、木の實を神様に斷りもなく取つて食つたのは悪いかも知れぬけれども、何も此の位のことは二日か三日禁足でも言付ければ宜いと思ふ、どんな木の實であつたか知らぬが、梨子でも桃でも林檎でも十や二十食つたからと言つて、さう大したことではなからうと思ふけれどもゴツトは大變怒つた、不都合極まる、此の罪は子々孫々、人間の有らん限り許さぬと云ふことになつて来る。チヨツとどうも罰が重過ぎる、どうしても是は控訴上告をして裁判を仕直して貰はなくしてはならぬ(大笑)東洋の方や佛教の方では、其の人の犯した罪は憎むが其の人は憎まない。「罪を憎んで人を憎まず」で少しの關係は言はぬこともないけれども、先祖の罪まで子々孫々己れが負ふと云ふことではない。「アダム」「イブ」と云ふやうな知らない所の者が、何千年の前に花園の木の実を食つた罪をば、それからの一切の人間が背負つて居つて、之を償はなくしてはならぬ、此の儘では地獄に行くと言ふ。そこで人間と云ふものは「罪の子」と云

ふ。嫌な名前を付けたものだ、何かと言ふと直ぐ「罪の子」「罪の子」と云ふことを無暗に言ふのである。それで基督教に依つて洗禮と云ふものを受けない限りは皆な「罪の子」ぢや、天照大神でも天子様でも御釋迦様でも孔子でも皆「罪の子」であると言ふ。それがどうも基督教の淺薄なる教義であると云ふことを表白して居る。けれどもそれは宗教が淺くてやりきれぬものだから、段々人間の心にも少し清い尊いものがあると云ふことを言ひ出すやうになつて来た、今獨逸あたりでは盛んに人間の心に神が働くと云ふことを大分強く言ふやうになつたのであります。併し是は後世段々と變つてからの事で、初は神に造られてさうして罪の塊であると云ふ、神様は素敵に偉いものである、唯だ此の世界は神様が造つたと言ふ、是が所謂哲學上の研究からしますと云ふと、随分善い悪いの議論がありますけれども、此の創世紀の思想と云ふものは淺薄極つたものである世界は神に依つて造られなんと云ふことも甚だ道理に背いたことである。さう云ふ蛇に

騙されて「罪の子」になつたと云ふことは、哲學上道徳上から考へると總て盾を打つた思想であつて、今日の文明人を満足せしむる價值の無いものであります。(未完)

◎日蓮聖人の御事蹟(奉談)

熊澤優子

△立正安國論

あたみ見る人おろかしきかな

△草庵燒打

住み給ふ草のいほりはもゆるとも

△伊豆流罪師弟交情

まことの道はいかてやくべき

△悲母蘇生

西東へたつるとも法のために

△小松原法難

たらしねのたえなん魂の玉の緒を

△矢は雨とふりつるき刃はすしき穂の

あやふさ中にまもりす神

# 日蓮聖人教義綱要 (第七回)

井村日咸

## 第二章 佛陀論

### 第一節 佛陀の地位

本章よりは前章に申し上げた教觀の各要項の第一出發點たる佛陀に就て、先づ教門の第一出發點たる佛陀に就て、佛陀とは如何なるものなるやとの會得を充分にせねばなりませんゆへ、本節以下七節に分つてお断を致します、第一にお断を致すことは宇宙に於ける佛陀の地位である本論第一章第一節に於て宇宙を迷悟の二つに大別することは申上げておいたが、之を更に細別すると

宇宙 迷 一六凡：地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上  
悟 四聖：聲聞、緣覺、菩薩、佛陀

の十界となる、六凡はその苦樂の程度に依つて分別したのであるが、共に生死輪廻の苦痛を免れざるが故に、迷と云ひ凡夫と云ふたのである、四聖は共に生死の苦

を解脱して居るお方々である故に悟と云ひ聖人と云ふたのであるが、同じ聖人であるけれども其證悟の程度に於て徹底せるとせざるに依つて、四聖の區別が出来たのである、此十界を一例を以つて譬へて見ると左の如きことであると思ふ。

六道の凡夫 負債のある人  
聲聞 緣覺 財產のなき人  
菩薩 財產ある家の子息  
佛陀 財產ある家の主人  
六道の凡夫は、惑と業との因縁に依つて束縛を受けて生死の海に沈淪して永く出る期なきこと、債務ある人の常に苦痛を受けつゝあるが如き状態である、聲聞緣覺の二乘は三界の生因を斷滅して生死輪廻の苦患を免れ得たけれども、而も空無の涅槃を得て灰身滅智の境界に入ること、負債も無く財產も無き無一物の人の如くである、菩薩は佛陀の證悟に入らんとして、未だ達せざるの人なるも、近き將來

に於て佛陀の證悟に達し得るの人なれば財產家の子息が將來其家を継承することを得るが如きである、佛陀は證悟に徹底して剩す所のなき人である故に財產家の主人に例したのである、法華經信解品の四大聲聞の領解には、窮子と雇人と長者子と長者とに譬へてある、前の例と同意味である、故に宇宙の全體は十界と分れたけれども、六道の凡夫は共に救済を受くべきの人であり、四聖は救済すべきの人であるが、聲聞緣覺の二乘は迷界は出てたれども未だ積極的に何物をも有せざれば、他人を救ふの力は充分でない、菩薩は長者子として相當の力は有るけれども未だ徹底して居らぬ、佛陀のみ最も大なる救済の力を有して徹底的に吾人を救済し給ふのである、茲を以て、佛陀は宇宙の最上位に位せらるゝものであると云ふことを領解願ひたい、近頃の日蓮主義の學者に十界の頂上妙法蓮華經など云ふて十界の上に妙法蓮華經と云ふ一界がある様に説いて居る人がありますけれども、これは普通の教相に無い事でありますから、そんな説は願ふ必要はありません

ん、私は佛陀が宇宙の最上位であり佛陀以上に何物をも存在して居ないと信じます、佛陀の全體が妙法蓮華經であつて佛陀以外に妙法蓮華經ありと云ふが如きは法華經を知らず日蓮主義を知らざる人の云ふことと思ふて居ります、尙本節に申し上げた四聖の事は更に細かく申せばいろ／＼に分れますが、それは専門の研究に屬し吾々の信仰に直接に關係なき事故一括して申上げて置きました、

### 第二節 佛陀の意義

佛陀と云ふ言葉は梵語である。「ほとけ」と和訓して居る、煩惱の束縛がほとけと云ふ意味であると云ひますが、此で全部の意味は言ひ顯はされて居ない、ほんの一部分の意味である、佛様の意味合は佛陀と云ふ言葉では完全しない、故に佛様と云ふ意味合を完全に意識するには佛の十號と云ふ十通りのお名前がある、夫れを心得なければお分り難い事であらふと思ふ故、左に十號の事を申し上げます、佛陀と云ふも十號の中の一號であります、十號とは法華經中には處々に出て

居ります。

- 一、如來
- 二、應供
- 三、正徧知
- 四、明行足
- 五、善逝
- 六、世間解
- 七、無上士
- 八、調御丈夫
- 九、天人師
- 十、佛

の十號で別名である、此が總名として「世尊」の一號が最後に附加へられ、今一々の名に就いて解釋しますと、  
一、如來、とは梵語では多陀阿伽陀と云ふ、法華經序品には多陀阿伽陀とあるが同じ事である、虛妄なきを云ふて、佛が如實の道即ち眞實の道を證り給ひたるが故に其言説に虚妄が無いから如來と云成實論には如實の道に乗じ來つて正覺を成ずと云てあるのが如來の意味である。

二、應供、梵語には阿羅河である、佛は萬行圓滿して、智慧福德具足し給ふが故に人天の供養を受け給ふて衆生を饒益し給ふを言ふのである、此は佛を田に譬へ供養を播種するに譬へたのである、田に種を下すならば、一粒の種は數千萬倍の果實を得ん、而も肥田は一層に多くの果實を得るが如く、如來の福田は一粒の供養を爲すも數千萬億倍の功德を酬ひ

給ふが故に、佛には應供の徳ありといふのである、菩薩二乘俱に福田の名ありと雖ども、佛とは比ぶべくなき故に佛を大良福田と稱し奉るのである、末世の僧徒は佛陀の慈光の下に人天の供養を受くとも、少敷なりとも應供の徳あるもの果して一人なりともありや否やである。

三、正徧知、も亦正等覺と云ふ梵語には三藐三佛陀である、佛は一切智を具足し一切の法に於て知しめし給はざる處なきが故に正徧知と云ひ、一切法を以つて平等に衆生を導引し無上正覺を成ぜしめ給ふが故に等正覺と云ふ、前段は佛の證智に就て言ふたので後段は佛の活動に就いて言ふたので何れも意義は違は無い。  
四、明行足、梵語は釋迦摩羅那三般那と云ふ、明とは宿明、天眼明、漏盡明の三明である、宿明とは過去の宿業を知る天眼とは如何なる障壁をも通じて遠見する事が出来る力漏盡とは煩惱の滅盡したるを云ふ、此三明を具足し、身口意の三業清淨にして、一切の行に於いて喜修し満足なる故に明行足と云ふ、佛の三業清淨の徳を歎じたのである。

五、善逝 梵語修伽陀、即ち妙往の義、佛陀は無量の智慧を以つて諸の煩惱を斷盡して、佛果に往趣せられたので、再び迷界には還り来り給はざるが故に妙往と言ひ善逝と云ふたのである、凡夫の逝くのは、逝きもするが還りもする、往返常なきが故、善逝とは言ふことは出来ない。

六、世間解 梵語路伽德、世間出世間の因果の諸法解了せざる無く、衆生國土の相を解了して誤りなきが故に世間解と云ふ。

七、無上士 梵語阿耨多羅三藐三菩提、三界天人凡聖の中に於て第一最上にして比すべきもの無く、與に等しきもの無きが故に無上士と云ふ。

八、調御丈夫 梵語富樓沙曇藐婆羅提、佛陀の化他の力用を言ふ、大丈夫の力用を具して種々の法を説き一切衆生の邪惡の心を制御して、垢染を離れ大涅槃を得せしむること、調御師の象馬を制御して調へざること無きが如くなるに譬へて云ふたのである。

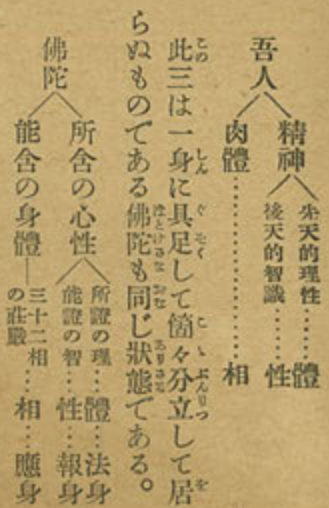
九、天人師 梵語は、舍多提婆魔奴舍

十、佛 悉く言はゞ佛陀なり梵語、翻譯して覺者と云ふ、佛は世間出世間の總相別相を覺知し給ふて深く法界の妙相を究め迷界の群生を救ふ、堅には三世を徹見し横には十方を照耀し、自在無碍にして無邊の衆生を濟度す、其自行化他の絶大圓滿なるもの他に比すべきなく自覺、覺他、覺行圓滿なるを佛陀と稱するなり。

世尊とは梵語婆伽婆、世間尊なり、兩足尊と云ふも天中天と云ふも同意義なり以上の十徳を具するもの佛を除いて一人もあること無し、故に佛を世尊と號し奉るなり、二乗と云ひ菩薩と云ひ一分の徳を具するものありと雖へども十徳具足して圓滿なるは佛の外には無いのである、吾人の信仰する佛陀は斯る十徳を具し給ふた智慧圓滿の佛陀であると云ふことを

があるが何れもこれも象の一部分には違くないが一つ／＼では象にはならない、佛の佛陀觀でも大分斯ふ云ふ有様に説かれてある様に思はるゝ、其一部分を説いて佛陀である様に説いて居る向がある、これは眞實の佛陀は分らない、私共は此弊に陥らぬ様に佛陀を考へねばならぬ、佛陀を解するにあまりに解剖的に分解し過ぎて居るのではあるまいか、分解することは必要であるとしても、更に之を組立ねばならぬのを、解いたなりて組立てないのが、今の佛の佛陀觀である様に思ふ、今は古い研究に因はるゝこと無くして、法華經 壽量品に示された三身即一の佛陀觀について其體相をお断致しませう。

佛陀の體相と云ても吾人のそれと違ふべきではない、方便品に如是相如是性如是體乃至本末究竟等と説かれてある様に十界の相性體等は究竟して等しきものである以上佛の體相も衆生の體相も違ふべきでない、故に佛の事を考へるには自身を考へるの如く早徑である、そうすると、吾人の體性相は左の如くである。



此三身は佛陀一身の三面にして箇々に分立したものは無い、故に天台大師は、此三如來若し單に取らば則ち不可なり、三法具足するを祕藏と稱し、大涅槃と名づく、單に三法を取つて稱して如來と名づくるなり、と云はれてあるが、三身即一身の意味は明かである、又文句の中に應身釋迦牟尼如來を釋して、智と體と眞と能く大用を起す、隨機普現し説法利生すと云はれたが、此智と體と眞と能く大用を起すと云ふことが即ち三身即一身を言順して居るのである、法華經 提婆品の中には、微妙の淨き法身相を具すること三十二八十種好を以て法身と應身の分離せざるを説いたのは法身と應身の分離せざるを説いたのである、眞理の法聚を法

深く其信仰意識に明了に致して置かれたいのであります、そうでないといふ完全なる信仰を得ると云ふことは難いのであります。

第三節 佛陀體相

本節には佛陀の體相は如何様なものであるかと云ふことをお断する。由來佛陀の事を断する場合には、其一部分を以つて、これが佛陀だと云ふ、部分々のお断であるから甲の佛と、乙の佛とが大變に違ふ様に思はるゝ、處が第一一部々々が寄り集つて一體の佛となつて居らぬと云ふ様な鹽梅である。涅槃は衆生撫象の譬がある、象の牙を握んだものは象は大根の様なものだと云ふ、其耳に觸つたものは象は箕の如きものと云ひ、鼻に觸つたものは石の如しと云ひ、脚に觸つたものは木の如しと云ひ、背に觸つたものは麁の如きものと云ひ、腹に觸つたものは繩の様だと云ふたと云ふこと

佛の壽命は無量なりと説かれたれども、應身報身の壽命は有限なりと説かれた、日蓮聖人は果目抄に「法華前後の諸大乘經一字一句もなく法身の無始無終はとけども應身報身の願本はとかれず」と仰せられたのはこれである、法華經無量品には應身如來の壽命長遠を説て其實在の意義を闡明した、今壽量品に依つて佛壽の無限をお断致さう、第一に釋尊の本體たる、法身の壽命は如何であるかと言ふと、元來法身の體は色質あるにあらず、法性の理を指して言ふのであるから、眞理に壽命の有限なきを壽命とする、此壽命は無變の變動なきを壽命とする、此壽命は無變である、經に生死の若は退若は出あること無く、亦在世及び滅度の者なしと説けるは法身の壽命である、次に報身の智慧は法身の眞理に冥合したる智慧なれば、法身の理既に無限の壽命なれば報身の智も隨つて無限の壽命を得るのである、經に慧光照すこと無量にして壽命無數劫なりと言へるは報身の壽命の無限を説いたのである、第三に應身の壽命とは應身は衆生應身の身なるが故に、佛陀の應化

無限なるも應身佛の壽命となす、智と體と冥合して大用を起す、其大用たるや化他起物するに、其機に應じて大小長短一概すべからず、故に經に「度すべき所に隨つて處々に自ら名字の不同年記の大小を説き、亦現して涅槃に入るべしと言ふ、即ち佛陀の活動連持相續して無限なるを應身の壽命無限なりと言ふのである、茲に注意せねばならぬのは、佛陀の活動が相手に依つて年記の大小名字の不同を生ずると言ふことに就いて應身佛の壽命を有限なりと解することである、一寸考へると有限の様に思へるが、決して有限ては無い、何故と云ふならば、應身の佛が壽命に長短ありと示すのは、佛陀の自體の壽命が有限であるが爲めにあらずして所化の衆生を化度せんが爲めの必要に基く爲めである、其の必要に依つて長短自在に應同し得ることが出来る、佛陀自在の生命は無限なれども、若し無限に存在を示せば衆生は憍恣の心を生じて難遣の想を生ぜざるが故に、此等の衆生の爲めに涅槃を現じて戀慕の想を生じ渴仰の心を起さしめ給ふのであるが故に、これ

を以つて佛陀の生命は有限なりと解すは誤である、佛陀は無量なる生命をば衆生の爲めに有限なりと示限して居らるゝのである、其思召の程を知るならば我々は片時も早く覺醒して佛様の御苦勞を減ずる様に心掛ねばならぬ、然るに此意を得ずして却つて佛壽を有限なりと解するが如きは飛んだ間違と言はねばならぬ、佛地論の中に三種の常住と云ふことが出て居るが、此三身の常住に當るのである、參考までに申上げて置きます。  
一、本性常 其本性常住にして無生無滅なるを言ふ、法身の常住なり。  
二、不斷常 常に法性の理に依つて間斷なきを言ふ、報身の常住なり。  
三、相續常 十方世界に於て没し已つて復現じ化窮盡すること無きを言ふ、應身の常住なり。  
此三種の常住を一身に具へて常恒不斷の化導斷ゆると無きを、久遠實成の釋迦無尼佛の常住の生命とは申すのである。

機微譚語

山根青村

五一、女性の味方

一條院の御宇播州書寫山に性空上人とて貴き聖者御座しける、法華讀誦の床の上には四壁疎なりと雖ども八風浸し難く、六根清淨の心の中には一瓢空なりと雖ども三昧自から濃かなり、愛を以て平等性智の莊嚴は表裏隔つる所あることなし、其北上東門の女院華洛より懺悔の爲に密に書寫寺に登り給へり、上人是を前に知して曰く、明日午の時に八人の鬼來るべし、若し來らば鎮西の方へ下向せりと答へよ。果して女院並に和泉式部以下女房八人皆興より下りて坊に入る、娉婷たる面容は芙蓉の曉の波に浮ぶが如く、婀娜たる腰姿は楊柳の夕嵐に亂るゝに似たり、李夫人が媚揚貴妃が粧ひ誠に妙なり。寺僧共すはや妖物御ざんなれと筑紫下向の由を答ふ、女院之を閉しめして伽耶山の月俄に傾き雙樹林の花忽ち萎みたる御

心地して言ひけるは、我等罪業深重の故に其罪を悔て謝てけるに、御他行とな遠路なれば志のみ有て力なき限りなり、是に就ても女人の身程口惜しき事はなしと泣々立歸らんとせられしに、御供の和泉式部上人御覽あれとや坊の柱に書き傳る歌に  
暗きよりくらき途にぞ入りぬべし遙かに照せ山の端の月  
上人聞しめし哀れとや思召けん、呼返して御對面ありける、女院の曰く女人は何を修行して苦道を遇れ侍るべきと御尋ありければ、上人法華經をとお答へあり從冥入於冥永不開佛名の一偈八字の講演ありて後、御經の蓋にかくぞ。

二つなく三つなき法と聞く時は五つの障あらしとを思ふ。(三國傳記八)  
女子の性情には涙もろい同情に富んだ閑雅な物優しい特長を具へて居る、その特長美點を極度に發展すれば、變て眞平

の菩薩にもなり得る。觀世音とか文殊師利とか菩薩達の畫像を見れば、何れも優美な慈愛の滴る如き女性そのまゝの面貌を見るてはなにか、眞ぞ女性は慈愛の權化である、同情の凝結であるとも云ひ得らるゝ、それと同時に女子の性情には愛着、愚痴、嫉妬など嫌惡すべき短所惡徳をも具へて居る、打捨て、置けば此短所惡徳は遠慮會釋なく頭角を擡げて、肉身の其まゝ、鬼にも蛇にもなり兼ねない恐ろしの容姿ともなる。華嚴に外面如菩薩内心如夜叉と説ける杯、全く此短所を罵倒し惡徳を叱咤せられた御聲である、斯くて佛陀は四十餘年猛烈に此叱咤惡罵を繼續されたのである、今の念佛、眞言、禪宗杯其所依の經典の悉くは全くこの筆法である。それが法華に來りて法輪一轉女性讚歎の梵音となつて居る。提婆品を御覽なさい、慈念衆生と云ひ志意和雅と云ひ閑雅な物優しい美の方面のみ擧げられて居るではないか。法華は眞ぞ女子の味方である、飛立つ計りうれしみ渴仰すべき唯一の時方である。一切經と法華經とは、そも何故に女子に對する所説かくの如く異



なるか、是れ心すべし由々敷問題である  
まいか、さては又女人成佛を説かざる  
一切の佛教聖典を依拠として一宗  
團をなせる各宗派の人々、此問題を閉却  
して而も御身達の大恩ある母御前の後世  
を何とめざる。若しそれ佛院論の徹底、  
未徹底、佛性論の究竟未究竟てふ大問題  
を會通せんば大菩提心あらましかば、否  
でも應ても法華に來らざるべからずであ  
る。一日蓮法華經より外の經を見候には、  
女人とは成度も候はず、或經には女人を  
ば地獄の使と定められ、或經には大蛇と  
説かれ、或經には曲れる木の如し、或は  
佛の種を焦れる者とこそ説れて候へ、佛  
法ならぬ外典にも、榮啓期と申すは三樂  
をうたひし中に女人と生れざる事を樂と  
立られ候へ、災は三女より起ると定めら  
れて候に、法華經に計り此經を持つ女人  
は一切の女人に過ぎたる而已ならず、一  
切の男子に超へたりと見へて候、所詮一  
切の人に訪られて候よりも、女人の御爲  
には糸惜と思はん男に不便と思はれたら  
んには過ぎず、一切の人は惡まば惡め、  
釋迦多寶十方の諸佛乃至梵天帝釋日月

等にだにも不便と思はれれば何か苦しか  
るべき、法華經にだにも讚められ奉りな  
ば、何か苦しかるべき何か苦しかるべき  
南無妙法蓮華經」とは聖日蓮の四條金吾  
女房に與へ給ひし消息なり豈日蓮上人の  
みならんや、眞率に佛教判釋の正系を  
辿らば、何れも此結論に到着すべきであ  
る。書寫の性空上人は流石に偉儒。  
聖語、今法華經の時こそ女人成佛の時  
悲母の成佛も顯れ、達多惡人成佛の時  
時慈父の成佛も顯はるれ、此經は内  
典の孝經也。(開目録下)

### 五二、口は禍の門

西郷南洲翁の家僕に熊なる者あり、眼  
に一丁字なしと雖も、人と爲り飽まで剛  
毅にして頗る理義を解す、翁夙に之を愛  
し出入起臥毎に之と相與にす。一日太政  
官に出仕し例の如く僕熊之に扈從す、退  
廳の途次主従連れ立ちて市中の只有る刀  
劍舖に立寄り、古劍類何れとなく打見  
やりたるも、一口として翁の意に契ひし  
ものなし、偶々一婦人の舖頭を過れるあ  
り、姿容艶麗服飾亦鮮美にして頗る人の

視線を惹くに足る、翁思はず之を一瞥し  
傍に侍せる熊に對し低聲に「熊、予も  
彼の様な正宗を買度ものなり」と戯れけ  
るに、熊之を聞き大に不興の顔色なし、  
何等の返答も爲さず、既に邸に還り直ち  
に翁の前に至り、容を正して「戯れにも  
彼様の言仰せらるゝものにあらずと言ひ  
放ち速かに己が部屋に退き籠り、其後一  
切また翁の爲に事を執らず、以て意の決  
する所あるを示す、翁も亦強て事を執ら  
しめず、蓋し翁の家事、爨炊の鎖末に至  
るまで熊常に之を辨ず、是を以て主従食  
はざることを殆ど三日、翁遂に其太慥に堪  
へ兼ね、且つ其言の甚だ理あるを見、更  
に熊を座に延き、謝して曰く我れ過てり  
と、是に於て主従懽然相見る元の如く  
翁の腹始めて三日の飢を療するを得たり  
と。(三香文集)

所言所行一如徹底を要すと云なり、經に如  
來共宿と説かれたり、吾人寢ても覺ても  
常恒不斷に、如來と共にあり神と共にあ  
りと緊張せる氣分堅實なる信念だに逸せ  
ずば、眞ぞ俯仰天地に愧ざるの域に達す  
べく、人格修養も此處まで達すれば落第  
の氣遣ひあることなし、顧みて現代人は  
如何、兎角に小慧しく伶俐振りて、とも  
すれば眞面目の世渡りを嫌ひ、他人のそ  
れをも何の奴等が生意氣千萬にと貶す癖  
あり、意己に然り言語動作悉く不如法な  
らざるはなし。げに口は禍の門、一代の  
傑物南州翁さへ不用意の戯言に三日絶食  
の苦痛を嘗む、まいてや凡俗の吾人をや  
心すべき事なりかし。

### 自慶會設立大會

勞働者に精神的の慰安娛樂を興へ、之  
を善導し、以て健全なる文明を擁護せん  
との趣旨の下に成れる自慶會は其設立大  
會を三月二日午後一時を以て有樂座に開  
催せり、會者約七百名定刻に至り、司會

者小原陸軍少將開會を宣し「君ヶ代」の奏  
樂に次て會歌「國の寶」の合奏ありしが、  
譜は極めて勇壯活潑にして自ら聴者をし  
て勇往邁進の氣を起さしむるの感あり  
き。次て海軍大將齋藤男爵教育勸語を捧  
讀し、理事長矢野茂氏自慶會の期する所  
は勞働者をして自慶満足の生活に立たし  
むるにある意味の趣意書を朗讀し、理事  
岩野造船大監は昨年十二月本會を發起せ  
し已來の經過を簡單に報告し、且つ本會  
の目的とする處は事頗る重大にして其效  
果を短時日に收むべからざるも、悠々之  
を放置すべきにあらざれば、尤も熱烈に  
晝夜兼行以て目的を達成するに努力せん  
と述べ。次に後藤内務大臣、平沼檢事總  
長、井上東京府知事、高橋東京市長代理  
の祝詞あり。次て講演會に入るや佐藤海  
軍中將は自慶會發起の一人として、會の  
精神を極めて明快に解説し了つて橘旭紘  
の琵琶演奏、松林伯知の講談あり、更に  
第二次の講演に入りて算法學博士は「祖  
先の美風なる題下に我國體の精美を發揚  
したる後」竹本綾之助一門の義太夫、寶  
樂會榮樂の浪花節あり終りて宮岡中將發  
聲の下に萬歳を三唱し一同歡を盡して散  
會せしは午後五時なりき。當日の後藤男  
の祝辭は左の如し。

### 祝辭

凡そ文明社會にありて最大の要素たる

勞力に衣食する人々を善導してその神  
身に慰安満足を得せしむることの世に  
大切なるは今更説を待たざる所近者  
時代の要求に伴ひ往々此の種の美名を  
以て起れる會團ありと雖もその效果の  
顯然たるものに至りては稀なり蓋し貧  
者に對する貧者の同情は多く實際に價  
値なし富者富に居るの道を知り貧者分  
に安するの間に於て言ふべからざる麗  
はしき徳風は生ずるなり而してこれが  
媒介となり漂たるべきものは即ち今次  
朝野知名の士の感奮に依りて生れ出た  
る自慶會の任とす予は會の目的に於て  
滿腔の賛同を表するに共に之に關係す  
る人々が予の常に畏敬する先覺者なる  
に於て衷心歡喜に勝へずその成功何の  
疑があるべき爰に一書を呈して祝詞に  
代へ且つ自慶會の隆運を祈る

大正七年三月二日  
内務大臣男爵 後藤 新平



照小田耕田氏



### ●本州中部聯合布教團 規約

- 一、名稱 中部本州聯合布教團と稱す。
- 二、目的 中部本州各地方の布教及教務の擴張を計るを以て目的とす。
- 三、範圍及分區 範圍は本宗々制に規定せられたる布教區域第十二三四及第十八教區十九教區とし分區を左の五に分つ。
- (イ) 駿東地方 (ロ) 遠東地方 (ハ) 名古屋地方 (ニ) 京阪地方 (ホ) 福井金澤地方
- 四、役員 本團に左の役員を置く。
- イ 理事七名 諸般の事務を處理す。
- 任期は三ヶ年とし毎分區より一名を選出す(但し最初の理事は發起者を以て之に充つ)
- 理事中互選を以て當番幹事一名を定む(任期一年)
- ロ 評議員若干名 重要な事項を審議す任期なし
- 理事會に於て之を推薦す。
- 評議員會の召集は理事會の決議に依る。
- ハ 講師若干名 布教に従事す任期なし、理事に於て之を依頼す。
- ニ 會計 任期三年、理事會に於て之を委任す。
- 一、事業 講師二名又は三名を以て一組とし、毎年五回一分區に一組の講師をして布教せしむ、講師の組合せ、布教分區の選定、其時期、其他必要な事項は其都度當番理事に於て之を處理す。
- 一、經費 講師の接待其他講演會開催に關する諸費は當番寺院の負擔とし、講師の旅費は本團より實費を支辨す。
- 贊同寺院は毎年本宗々費四期分の一の割にて團費を

義納するものとす。  
一、事務所 當番理事所在地に事務所を設置す。  
附則 本規約に明記せざる事項は常識を以て之を處理す

以上  
大正七年二月十一日  
總本山妙滿寺に於て

- 發起人 イロハ順
- 石井 應 松本 堅晴
  - 金光 孝 萩原 啓門
  - 武田 顯龍 有田 安造
  - 岡友 日斌
  - 坪永 日監 岡本 圓正 西山 日諭 長谷川 日濟 高橋 運碩
- 【評議員】 金光 孝 順
- 【會計】 金光 孝 順
- 【事務所】 京都二條寺町妙滿寺中法光院中

### ●照量教團發會式

伯耆松崎本立寺は宗門の富家市橋龜藏氏檀頭として檀信徒四十戸を有する高等寺院なるも宗教觀念の乏しき土地柄として檀信者の少なき一年一度の御會式さへ市橋一家を除きての御参りは二三名の外なく大正の今日大黒さんや門札を配付するなど、顯木寺院に見る事と出来ざる状態、堂宇修繕等は一切は市橋家の任事として關せず焉の無責任なりしも、今同住職新任を機として諸般の改革に邁進的行爲を一掃され照量教團の名稱に會合機關は設けられ毎月一回已上本立寺に集り日蓮主義信條に精神的向上を謀り地方改善の中堅たらんと期し尙本山大法會登山團も組織され申込者二十五六名になりて二月二十四日御寶前に奉告八相成道の題下に朝倉住職の講演ありて和氣靈龜の裡に散會せり。

### ●青森地明會の近況

青森地明會は七年一月に同地現在敷三十三名にして地方會員を算すれば百名にちかしといふ。現幹事は中

村藏藏、阿部秀三、鈴木新吉、高杉要三郎、渡邊公治、柏木吾市の六氏にして、本年新年大會の如きは儀式堂々有志演説等ありて盛會なりしと、左は同會員名なり。  
△青森地明會々員名簿 大正七年一月十九日現在 (イロハ順)

- 伊藤 恭助 伊藤 祐治 西 專藏
- 渡部 公治 柏木 吾市 高杉 要三郎
- 高木 護明 田澤 長九郎 中村 謙藏
- 中村 龜治 宇和野 頼三 瓜田 直彦
- 井深 丹吾 登坂 龍郎 松島 清
- 高坂 貫一 海老名 彦八 遠藤 直俊
- 阿部 秀三 天內 男也 佐伯 文治郎
- 佐藤 賢作 佐治 熊太郎 佐々木 秀治
- 北田 重美 菊地 金一郎 宮田 菊次郎
- 森崎 九八郎 廣澤 勇次郎 菅原 萬藏
- 鈴木 新吉 杉澤 良太郎 鈴木 榮吉

### ●千葉縣六教區春季 布教大會

山武郡大綱町宮谷本國寺に於て二月廿二日午後一時より晝夜二回に渉り大會を催す。定例鐘と共ニ導師(講長)千原野生、寺林秋樹(副講長)山崎英樹、田邊第六教區管事、外に四隣住職等正装にて入道場、富田朝日講世話係、本國寺檀家總代等の案内にて一同着席、法要勸修、土屋講長の宣言書、秋山講長の式辭、支學林布教部總代安藤乾彌氏、世話係高田藤吉氏の祝辭朗讀あり、亞て布教講演に移る。秋山講長會の辭、栗原源有師の如日光明、土屋布教師の先づ國家を新して須らく法々立つべしの演説あり。餘興藝術布教として國柱節を本校院城其演す。夜間は大綱支學林布教部生徒の演説あり外に本校院の國柱節ありたり。參客衆一千名を越え近來稀に見る盛況を極めたり。

●本州中部聯合布教團發會(十八日)  
開會之辭 理事 金光 孝 順

正しき宗教の定義 上 田 智 量  
偉大なる力の表現 岡友 日斌  
東に帝都教團の旺盛あり、西に關山教團の布教傳道の活躍あり而して中部も亦た時代の要求に應み對教團聯合布教團を組織し、大に日蓮主義宣傳に努力せんと同志者の間に勃發し日出度本山妙滿寺講堂に於て發會開演せり、此夜近日になき隆盛の寒夜なれども熱心なる求道者五十余なりき。

### ●豐橋妙圓寺の改築

妙圓寺住職松本堅晴師は今同千有餘圓の寄附勸募により、大正三年國友師時代内部改築せし舊鬼子母神堂を更に修繕書院に改造工事中にて其他の大修繕をも爲し、來る四月初旬 祝下を招聘して大法要嚴修し併せて布教傳道をも爲す由。

### ●四恩教林

例月の如く去五日淺草區永住寺妙經寺に於て開會、岩泉江東氏は印度及南洋事情を、泰東日報社長金子雪齋氏は所感野口主任講師は日蓮主義より見たる矛盾を講演さる。

### ●身讀會

二月十一日紀元前に岩井氏宅に開けり。

### ●高知縣と統一節

高知日蓮宗は近年大に其發展を遂げ、或は主義の研究、或は人格の鍛錬を以て識者間に高潮せるの時、偶々藝術布教家宇都宮大郎氏の巡回を機とし一月十七日以來、二月五日に至るまで各所に於て布教し、中にも須崎町須崎寺は檀衆二百五十人、高知市堀詰寺は三日間に於て約二千人、商業學校にて六百八人、上野町事務所二百七十人、湖江要法寺にて二百八十八人等、此外數十圓の講演を爲す。太田氏は専ら傳記を講述し、川崎日忍、西木誠雅、金澤誠思、河野英俊、釋氏教澄、堀崎龍靜、瀧川良湖、蓮樂院日船の諸師應援され、田村吉太郎、山岡六兵衛氏等も亦聲援し、大に教勢を張りた



### 和歌「名所花」

#### 子爵 清岡長言選

- 天 東京市外雜司ヶ谷 矢野 浪子
- 地 京都御苑内 荒木せつ子
- 人 京都七條猪熊 中野 正甫
- 佳 作 角田川舟をとめてみつるかな夕日てりそふ花のさかりを 小石川 竹内 軌榮
- 風山花吹雪してその名にも今日はたかはぬ詠めなるらん 上 總 渡邊 乾航
- 清水の音羽の漣も静かにてくもと見まかふ花

### ○序列なし

- 都人うちつとるけりきのふ今日小金井の花眞盛りにして 淺草 山根 青村
- 吉野山歌ひし人をしのひつゝ昔ながらの花をみるかな 本 郷 永橋 榮治
- たひ人もしはしなめん志賀の山高根にかゝる花の白雲 下 谷 小柳 誠之允
- 名をきけは如何に床しきみよし野の花のさかりを今日も夢みつ 立川 長重
- 笹土もいかたとゝめてなかむらんあらしの山







(號八十七百二第)

- |                           |          |
|---------------------------|----------|
| 日蓮主義の信仰と活動                | 大僧正 本多日生 |
| 日蓮聖人教義綱要(第八回)             | 僧正 井村日成  |
| 機微譚語(五三)大義名分<br>(五四)寛濶の襟度 | 山根青村     |
| 日蓮上人研究の捷徑                 | 文學士 笹川臨風 |
| 課題和歌「野外董」                 | 子爵 清岡長言選 |
| 統一俳句、自慶會、各地雜報             | 多敷       |

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發

▶ 番三三五三三京東座口替振 ◀

將中軍海  
 述君郎太鐵藤佐

刊新最

我萬邦無比なる國體の尊嚴を能説し罄くして國民の自覺を叫び根本的に忠君愛國を唱へ併せて英傑日蓮上人の人格と教義の峻絶を鑽仰賞揚して思想の撰擇と修養を奨むるものは本書也。尊嚴の國體と秀絶の教法との相抱冥合の説述は論義整然字句熱烈にして一讀正氣靈動の概を生ぜしむ、國家、社會、教育、婦人の諸問題及び神儒佛、外來思想に對する批判、並に歐洲戰亂に對する感想、青年に對する訓誡、海外發展策等滔々數萬言辯じ明さるはなし。

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

日本國體と日蓮主義

三六判總クローズ函入  
 紙數四百五十頁  
 定價壹圓貳拾錢  
 送料 八錢

館文博

東京市

本町三

(行印會秀三 地番一目丁二町代土美區田神市京東)

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊)發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五錢)